にしかし厳しく歴史を検討する時期にきているといえる．本書はそのためにきわめて有益な海図を提供してくれる労作であることは言をまたない．

（瀧澤　利行）

［メディカルレビュー社，〒541-0045 大阪市中央区道修町 1-5-18　朝日生命道修町ビル，TEL．06（6223）1468，2009 年 11 月，A5 判，308 頁，3,800 円＋税］

ミュリエル・ラアリー 著
濱中淑彦 監訳
『中世の狂気　十一～十三世紀』

本書は，日本語で読むことができる西欧の精神医学の歴史・狂気の歴史の大きなギャップであった「中世」という空白を埋めることになる画期的な書物である．日本語で読める翻訳ものの西洋の精神医学の歴史は近年充実してきた．全体的な通史として，古いが詳細なジルボーグ『医学的心理学史』，短いが新しいロイ・ポーター『狂気』がある．それぞれの大まかな時代区分については，古典古代にサイモン・ベネット『ギリシア文明と狂気』，初期近代にミシェル・フーコー『狂気の歴史』，近代以降にエドワード・ショーター『精神医学の歴史』と，中世以外は一通り読むことができる状況だったが，中世の狂気・精神医学について日本語で読むことができる詳しい良書が存在しなかった．その空白を埋めたのが本書である．

本書を監訳した濱中淑彦は，シッパーゲス『中世の医学』『中世の患者』（いずれも人文書院）のような百科全書的で重厚な書物を訳してきた．これらはいずれも常に傍らに置いてレファレンスのように使われるものだという特徴を持っているが，この新しい訳業も同じような性格を持っている．本書は，中世の狂気をあらゆる側面から詳密にリサーチし，それぞれの章に各 200 程度の文献注がついている，本格的な百科全書的な研究書である．膨大な情報が語られているにもかかわらず，本書が無味乾燥に感じられないのは，史実の本質を伝えるような引用を選択してそれを生き生きと描き出す歴史学者の確かな手さばきが冴えていることと，章立てが論理的な構造を持っているからである．

本書は九章から構成されているが，中世における狂気の理解を論じた第一部と，中世が狂気に対してどのような行動をしたかという第二部に分かれている．第一部は，宇宙論的・宗教的な思想の中での狂気の理解を論じた第一章・二章・三章と，自然的・人間的な思想の中での狂気の理解を論じた第四章・五章に分けられている．第一・二章では狂気を悪魔に憑かれたと解釈する思想と，狂気は罪を犯したため神の罰として陥ったのであると解釈する思想が取り上げられて分析され，第三章では，そのようなネガティヴな考えと併存する形で，狂人は神により近い存在であるとする「聖なる狂気」の思想が論じられる．すなわち，狂気を神と悪魔に関係づけて論じる枠組みの中でも，中世の狂気は善と悪，神と悪魔の両義性を持っている．

この第一部の前半を占める宇宙論的な解釈に対比されているのが，第一部後半の自然的・人間的な理解の説明である．第四章では医学書が中心的に扱われ，中世の医学書が持っていた狂気の疾病概念が分析される．理論は主として体液論であり，アラビアから再移入されたガレニズムが中心である．疾病概念としては，フレネジー，マニー，メランコリーに加えて，レタルジー（倦怠）も加えられている．第五章では，トリスタンや円卓の騎士のイーウェンやランスロットなどが活躍する騎士道の恋愛物語を取り上げて，愛が人を狂乱に導く描写，狂人のふりをする描写などが分析さ

れ，それらが絵画上の狂人の表現と重なっていたことなどが示される．本書には82枚の図版が添えられているが，その図版が最も活躍するのは，この絵画上の定型化を論じたこの章である．

すなわち第一部全体としては，中世の狂気の理解には宗教的・超自然的な枠組みが存在していたこと，そしてそれと同時に，自然的・身体的・人間的な理解も併存していたことが示されている．ここで「併存」が強調されていることに注意しよう．かつては，ウェーバーやマルクスに倣って，「世界の脱魔術化」「世俗化」「聖俗革命」が歴史の重要なモメントだと信じられていた時期があったが，近年の歴史学は，宗教から科学へ，神と悪魔から人間へという移行に大きなモメントを見出さない傾向がある．

狂気への対応を論じる第二部も，かつての歴史学においては異質なものとして対比させられがちであった構造の併存を説いているといってよい．第六章では狂気の治療に聖人や聖遺物を頼ったことが論じられ，第七章では鎮静剤などの薬物を含めた医学が用いられたこと，薬物だけでなくフロイト派心理療法のようなものも用いられたと推測できることが描かれている．この二つの章で，宗教的な解釈に基く治療と，向精神薬などが発明されるまで20世紀初頭まで変わらなかったアヘンやヒヨスなどに依存した薬物療法，そして薬物療法と対比されがちな心理療法などの異質な対処が中世に共存していたことを説く．同じように，狂人の排斥と取り込みも併存していたことが，八章・九章で示される．八章では中世社会が異端やユダヤ人やらい病患者などの「周縁人」を作り出していく過程の中で，狂人も周縁化され排斥・監禁されたことが論じられる．次の九章では，宮廷の王の側でルールに従わない自由さを持つ狂人・道化が発展し，「愚者祭」と呼ばれる人々が狂人・愚者のふるまいをする祭りが定期的に開催されるようになったことを論じている．排除と取り込み・馴化という二つの相反する傾向が中世において発展していたというのである．

同書に序を寄せている著名な歴史学者のジャック・ル・ゴフが「中世の狂気，それは悪魔と善と神との間の振動である」と書き，「狂気の本質的な両義性」と呼ぶのは，中世の狂気の歴史において，両義性と異質な思考が混在したことをまとめている．その多様な姿を無数の資料を用いて浮かび上がらせた原著者と，それを日本語に移した濱中らの訳業は，日本語で読める西欧の精神医療と狂気の歴史の空白を埋めただけではなく，日本も含めて，どの時代における狂気の歴史の研究においても必要な複雑性への意識を教えてくれるだろう．机上に置いて常に参照されるべき書物であろう．

（鈴木　晃仁）

［人文書院，〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9，TEL. 075（603）1344，2010年1月，A5判，440頁，6,400円＋税］